

ディベートで主題に迫る

故郷の主題に迫るためのテーマ（論題）

故郷の読解学習を進めてきた中で討論となり、結論が出なかった内容があります。それが「故郷は変わったのか」です。生徒たちの中には、決着をつけたい、結論を出したい、あるいは知りたいという知的欲求が存在していました。

また、直接作品の主題に関わるものとして、授業者の方から提示したテーマがあります。「新しい生活はくるのか」です。主題を考えるときに、「『思うに希望とは、もともと・・・歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。』をわかりやすく説明しよう」とか、「主題をまとめてみよう」という発問では、説明したりまとめてみたりするのは難しいと思われまます。発問の良しあしは、この発問によって、適切な教材解釈を促すかどうか、意見の対立を生むかどうかの2つのレベルで判断することができます。

主題を考えるとき、この文のことを抜きにして考えることはできないので、他のことからこの部分を理解しなければ答えられないような発問、なおかつ意見が対立して討論となるような発問を考えなければなりません。

読解学習におけるディベート導入

文学的文章であれば、人物や状況について、説明的文章であれば、筆者の問題提起や結論の妥当性について、対立する2つの視点を取り出し、討論を仕組みます。その際、討論の柱となる題材は、生徒の読みの過程で拾い出します。また、初発の疑問や予想を生かすようにします。

読解学習では、個の読みをディベートを通して深めるようにします。大切なのは、アフターディベートとしての意見文作成です。ディベートにより、個々の見方や考え方の幅を広げたり、補充したりします。その結果を意見文としてまとめます。最後は学習を個に戻すようにします。

また、主張の論拠を明確にすることが重要です。そのためには、本文をじっくり読む必要があります。情報を収集する段階で、すでに生徒は本文を何度も読み直すようになります。自然と自分の読みを深めていくこととなります。

文学的文章の読解学習にディベートを取り入れる場合、どの段階でも使えますが、単元のどの段階で使うのかによって、その意義は変わってきます。単元の最終段階でのディベートは、それまでの学習内容の比較検討をねらいとしています。それまでの学習内容では解決ができないように見えるテーマ（論題）を設定することによって、認識を相対化させるわけです。

優れた発問でなければテーマ（論題）にはなりません。対立意見が出ない問いではディベートにはなりません。少なくともディベートの論題は、肯定と否定が明確になるよう、あらかじめ設定せざるを得ないため、かなり絞り切ることができます。